### 研 究

### 子どもの行動特性や母親の心理的な状態により どのような子育て支援が求められるか

一幼児期の子どもを育てる母親の養育環境別の検討一

金井智恵子1,2). 齋藤 正典1)

#### [論文要旨]

本研究では、子どもの行動特性や母親の心理的な状態によりどのような子育て支援が求められるかについて検討した。調査対象は保育所・幼稚園の子どもをもつ母親121名である。気になる子どもの割合はおよそ20%であり、支援必要レベルが高い子どもについては行動上の問題が多かった。子育て支援については、保育所と幼稚園ではそれぞれ要望が異なった。また保育所においては、子どもの行動上の問題があると、人的サポートを求め、幼稚園においては、子どもの行動上の問題があったり、母親が否定的な心理的な状態になると、子育ての相談場所を求めた。本研究より今後の子育て支援の構築に役立つものと考えられる。

Key words:子育て支援,子どもの行動特性,母親の心理的な状態,幼児,養育環境

#### I. はじめに

保育所と幼稚園では設立目的および利用方法が異なる。幼稚園は、学校教育機関で、「適当な環境を与えて心身の発達を助長すること」を目的として就学前の幼児に対して教育を行う機関であり、教育時間も4時間を基準としている。それに対して、保育所は児童福祉施設であり「保育に欠ける乳幼児及び児童に対して保育を行うこと」を目的とした施設で、保育時間も8(10)時間を基準としている。両親が共に家庭内または家庭外で就労することを常態としているなど、保育に欠ける状況にある子どもでないと保育所に入所することはできない。したがって、就労している母親は子どもを保育所に通所させることが一般的ではあるが、近年は幼稚園においても預かり保育を充実させることによって、保育に欠ける状況にあるような幼児にも対

応できるようになってきている。

女性の社会進出が進む中、就業状況によって母親の 子育ての意識が異なることも示されている。近年、幼 児期の子どもをもつ母親を対象にして調査を実施した ところ、就業している母親に比べて就業していない母 親の方が子育てに対する不安を抱えていると報告して いる<sup>1)</sup>。しかしながら、これまでの研究は母親の就業 形態と母親の心理面の関連性を対象としたものが多 く、通園先を含めた検討は行われていない。

日本の幼稚園・保育所における障害児教育・保育は、1970年代にその法令が整備され<sup>2)</sup>、"統合教育・保育"の考え方のもとで制度的に位置づけられ、展開してきた。しかしながら、2006年の学校教育法の改正、2007年の障害者権利条約の署名などを通じて、"インクルーシブ教育・保育"の原則を承認し、2007年より"特別支援教育・保育"を開始して、現在その体制整備を進

How Were Child-support Programs Related to Both Children's Behavior Characteristics and Mother's Psychological Aspects in Japan?

受付 13. 9.18

[2558]

採用 14. 3.23

Chieko Kanai, Masanori Saito

1) 相模女子大学学芸学部子ども教育学科(研究職)

2) 昭和大学医学部精神医学教室(研究職)

別刷請求先:金井智恵子 相模女子大学学芸学部子ども教育学科 〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京2-1-1 Tel: 042-747-9572 Fax: 042-749-6500 めているところである。しかしながら、先駆的な取り組みは、まだ始まったばかりである<sup>3</sup>。2011~2012年に静岡県で実施した調査によると、保育所と幼稚園において支援が必要と思われる発達障害児の割合については、保育所9.4%、幼稚園8.0%であった<sup>4</sup>。また郷間らは京都の保育所で調査した結果、発達が気になる子どもの割合は13.3%と高い値を示している<sup>5</sup>。さらに、平澤らの160ヶ所の保育所で実施した調査では<sup>6</sup>)、気になる子どもの割合は4.5%であるのに対し、小川らの234ヶ所の幼稚園の調査では<sup>77</sup>2.6%であり、保育所の方でやや発達障害および気になる子どもの在籍数が多くなっていることが示されている。このように、幼児期の発達障害および気になる子どもに対して支援を積極的に実施している保育所および幼稚園が増えてきている。

このような現状の中、数年前からは保育上困難を有する「気になる子」についての相談が増加している®。気になる子どもの増加の背景としては、主にグレーゾーンの発達障害児、生活習慣の乱れにより心身の健康を保つことが困難な児、非虐待児、一人っ子で自己中心的な児などが含まれる®。郷間らは、気になる子どもの保護者を対象にして調査を行ったところ、およそ60%の保護者が養育上の問題を抱えており、抑うつ傾向や情緒の不安定さをもつことを報告している100。

近年. 厚生労働省は. 次代の社会を担う子ども一人 ひとりの育ちを社会全体で応援するため、子育て支援 活動を推進している。また現在は女性の社会進出が増 大しているために、子育て中の母親においてさまざま な生き方が想定できる。母親の養育環境に応じて、子 育てに関する需要やニーズも多岐にわたることが予測 される。したがって、このような多様なニーズに対応 したきめ細かな子育て支援が求められる。しかしなが ら、母親の就労形態と通園先の養育環境に基づいて、 どのような行動特性があると気になる子どもと判断す るのか、また保護者はどのような心理的な問題を抱え ているのか、さらに、どのような支援を望むのかにつ いて明らかにされていない。そこで、本研究では、そ れらの点を明らかにしたうえで、母親の養育環境別に、 子どもの行動特性や母親の心理的な状態によりどのよ うな子育て支援が必要とされているのかについて検討 を行った。

#### Ⅱ. 研究方法

#### 1. 研究対象と調査期間

本研究の対象は神奈川県近郊の保育所(認可保育園)・幼稚園に通う3~6歳児をもつ母親161名である。質問紙は395部(保育所2ヶ所・205部,幼稚園2ヶ所・190部)を配布し,有効回収票数は169部(回収率42.8%)であった。内訳は保育所89部(回収率43.4%)、幼稚園80部(回収率42.1%)である。調査期間は平成24年7~11月である。

また母親の就業有無については、保育所に通園する子どもの母親では、週3日以上勤務する場合を就業ありとし、幼稚園に通園する子どもの母親では、就業なしをそれぞれ対象とした。

#### 2. 調査方法

質問紙は園長およびクラスの担任から直接保護者へ配布し、調査の主旨を書面にて説明し、同意を得た。回収方法については、1ヶ所の保育所および幼稚園では、それぞれ園内に回収ボックスを設置し、1ヶ所の保育所では研究協力者が直接回収し、1ヶ所の幼稚園では研究協力者に郵送するように依頼した。

#### 3. 調查項目

#### 1) プロフィール

母親の性別,年齢,職業,家族構成,子どもの性別 と年齢,子どもの発達で何か心配な面はあるか,(あ りの場合)どのような面が心配かという項目を設けた。

#### 2) 子どもの発達特性

Goodman によって開発された「子どもの強さと困難さアンケート」(Strengths and Difficulties Questionnaire(以下、SDQ))は幼児期から就学前の行動を評価するための質問紙であり<sup>11)</sup>、わが国でも広く用いられるようになってきている<sup>12)</sup>。SDQ は25項目から構成されており、5領域に分類されている(①行動面、②多動・不注意面、③情緒面、④仲間関係、⑤向社会性)。それぞれの項目に対して3段階で評価する。基準値は、下位項目ごとに異なっており、①~④については、高得点ほど支援の必要性が高くなるが、⑤は逆転項目であるため、低得点ほど支援の必要性が高くなる。また①~④の領域ごとの合計得点(最高10点)により支援の必要性を High Need、Some Need、Low Need の3段階で評価する。得点

基準は玉井ら13)に従った。

#### 3) 親自身の心の健康

Hospital Anxiety and Depression Scale (以下, HADS) を用いた $^{14}$  。HADS とは、抑うつと不安のスクリーニングをするための尺度であり、不安と抑うつそれぞれ7つの質問項目に対し、その場で当てはまる項目を4段階 ( $0\sim3$ 点)で自己評価し、不安と抑うつを得点化するスケールである。得点が高いほど不安、抑うつが強いと判断する。日本語版のHADSに関しては、東らにより有用性が検討されている $^{15}$  。HADSのカットオフ値は、不安、抑うつそれぞれ9点、合計13点である。

#### 4) 子育て支援

厚生労働省の子育て支援を参考にして作成した自記 式質問紙を用いた。市町村が行う子育て支援の満足度 と必要と感じる子育て支援(子育て支援の選択項目, その他の子育て支援に関する記述項目)について項目 を設けた。

#### 4. 分析方法

母親の年齢、子どもの年齢、子どもの行動特性および母親の心理的な状態の2群比較については、t 検定を使用し、家族構成、子どもの人数、子どもの性別および子育で支援の2群比較については、カイ2乗検定を用いた。また、子どもの行動特性および母親の心理的な状態と、子育で支援の関連性については、スピアマンの順位相関係数を使用した。

以上の統計解析には SPSS 21.0 J for Windows を用い、有意水準は 5 % とした (両側検定)。

#### 5. 倫理的配慮

本研究は相模女子大学倫理委員会の承認を受けて実施した。本研究について、園長および保育者に研究内容等の説明を行い、調査対象である保護者には、文書による調査依頼を行った。調査への協力は任意であること、個人の回答や情報は守秘され、研究以外での使用はせず、研究後にシュレッダーで破棄することを伝えた。

#### Ⅲ. 結果

#### 1. 調査対象者の属性

表1に示すように、母親の年齢は30歳代が最も多く、家族構成はほとんどが核家族であった。子どもの数に

表1 母親の基本属性

	保育所(I	1=87)	幼稚園(1	V=74)		
	人数	(%)	人数	(%)	t(159)	Þ
年齢					-0.36	0.72
20代	16	(18.4)	5	(20.3)		
30代	49	(56.3)	36	(48.6)		
40代	22	(25.3)	23	(31.1)		
	人数	(%)	人数	(%)	$\chi^2(df=1)$	Þ
家族構成					0.73	0.63
核家族	84	(96.6)	73	(98.6)		
複合家族	3	(3.4)	1	(1.4)		
子どもの人数					2.78	0.25
1人	31	(35.6)	18	(24.3)		
2 人	38	(43.7)	35	(47.3)		
3人以上	18	(20.7)	21	(28.4)		

注:年齢においてはt検定、家族構成・子どもの人数においてはカイ2乗検定。

ついては,保育所は2人が最も多かった。両群で年齢, 家族構成,子どもの人数に有意差は認められなかった。 子どもの年齢の平均は4.6歳(SD, 0.72)(保育所4.5歳 (0.66),幼稚園4.7歳(0.76)),性差は,男子81名,女 子80名(保育所;男子47名,女子40名,幼稚園;男子 34名,女子40名)であり,両群で有意差は示されなかった。

#### 2. 子どもの発達特性と母親の心理的な状態について

保育所と幼稚園の子どもの支援の必要性については、全体で21.0%であり、保育所13.6%、幼稚園7.4%であった。年齢および性別においては有意差が示されなかった。また支援の必要性のレベルについては、保育所において Some Need は16名であり、中でも「行動面」、「情緒面」の得点が高かった。また High Needでは6名であり、「行動面」の得点が最も高かった。一方、幼稚園では Some Need は7名であり、「行動面」、「多動・不注意面」の得点が最も高く、High Needでは5名であり、「行動面」の得点が最も高く、High Needでは5名であり、「行動面」の得点が最も高かった。両群で差は認められなかった(表2)。

表3に示すように、子どもの行動特性においては、幼稚園に比べて、保育所の母親の方が、SDQ の総得点、「行動面」、「多動・不注意面」、「情緒面」において有意に得点が高かった。また、母親の心理的な状態については、両群で有意差は示されなかった。

#### 3. 子育て支援について

現在のそれぞれの自治体の子育て支援に対して、全

表2 保育所と幼稚園のSDQの支援必要性

	保育所	(N = 87)	幼稚園(N =74)				
	Some Need	High Need	Some Need	High Need			
	人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)			
SDQ 総得点	16 (18.4)	6 (6.9)	7 (9.5)	5 (6.8)			
行動面	12(13.8)	16 (18.4)	6 (8.1)	8 (10.8)			
多動·不注意面	7 (8.0)	5 (5.7)	6 (8.1)	3 (4.1)			
情緒面	12 (13.8)	4 (4.6)	4 (5.4)	4 (5.4)			
仲間関係	8 (9.2)	0 (0.0)	2 (2.7)	4 (5.4)			
向社会性	19 (21.8)	14 (16.1)	13 (17.6)	9 (12.2)			

注: SDQ: Strength and Difficulities Questionaire

表3 母親評価による SDQ と HADS 得点の比較

	保育所 (N =87)		幼科	<b></b>		
			(N =	=74)	t	Þ
	Mean	(SD)	Mean	(SD)		
SDQ 総得点	10.17	(3.4)	8.27	(4.4)	3.10	0.00
行動面	2.90	(1.7)	2.15	(1.6)	2.81	0.01
多動・不注意面	3.62	(1.6)	3.00	(2.0)	2.23	0.03
情緒面	2.09	(1.4)	1.43	(1.5)	2.85	0.01
仲間関係	1.57	(1.2)	1.72	(1.3)	-0.71	0.48
向社会性	6.25	(2.1)	6.53	(2.0)	-0.83	0.41
HADS 総得点	10.75	(7.0)	9.07	(6.4)	1.57	0.12
抑うつ	5.14	(3.9)	4.47	(3.6)	1.11	0.27
不安	5.61	(3.8)	4.59	(3.3)	1.76	0.08

注:SDQ:Strength and Difficulities Questionaire HADS:Hospital Anxiety and Depression Scale

注: t 検定

注:網掛けのところは、SDQ と HADS のそれぞれの項目に おいて有意差が示された。

体のうち、90名(55.9%)(保育所 51名(31.7%),幼稚園 43名(24.2%))が「満足」と回答した。両群において有意差は示されなかった。次に,子育て支援の必要性については,幼稚園に比べて,保育所の母親の方が,「児童手当などの金銭的援助」( $\chi^2=13.61$ , p<0.001),「職場の上司や同僚の意識」( $\chi^2=14.14$ , p<0.001),「働きやすい職場の労働条件」( $\chi^2=20.76$ , p<0.001)において有意に得点が高いことが認められた。一方,保育所に比べて,幼稚園の母親の方が,「遊び環境設備」( $\chi^2=7.62$ , p=0.007),「一時的に預けられる託児施設」( $\chi^2=27.02$ , p<0.001)が有意に高かった(図)。

子育て支援におけるその他の内容については、保育 所では主に待機児童の解消、託児施設、子育て支援の イベント、金銭的援助を望んでいた。待機児童の解消 については、仕事が決まっていなければ入れない現状 の改善、生後7か月以降にはすぐ保育所に入れるよう な環境づくり、0歳児の保育枠の拡大を希望していた。 託児施設については、病児保育の声が最も多く、夜間 の預かり、祝祭日の保育料の値下げ、ファミリーサ ポート、英会話や勉強を取り入れて欲しいと望むもの があった。

子育て支援イベントや施設に関しては、定型発達と 障害の子どもをもつ保護者の相談窓口やお助け電話. 幼児をもつ家庭への専門家訪問、保護者同士が話し合 える場(ピアカウンセリング)、子どもの交流や、祖 父母・父親に対する子育て学級等のプログラムが必要 だという意見があった。そして児童館は小学生向きで あり、支援センターは乳児向けであるため、幼児が通 う施設が欲しいという要望もあった。中には健康診断 などで支援センターの職員の方と話す機会があるが, カウンセリング感が強く,少しだけ話を聞いて欲し いと思っていても、大げさに取り上げられてしまうこ とがあるため、気軽に相談できる場が欲しいとのこと だった。金銭的援助については、子どもが大きくなる ほどお金がかかるのにもかかわらず、児童手当は子ど もが小さいほど多く、大きくなるにつれて少なくなる 制度に疑問の声があった。

一方,幼稚園では一時的な託児施設および子どもの遊び場の増設があげられた。一時的な託児施設について、育児で困った時に預けられる場、子どもの長期休暇(夏休み等)の間だけ預けられる場や小学生も預けられる場を望んでいた。また幼保一体型の認定こども園の設置を希望する意見があった。子どもの遊び場増設については、安心で自由にのびのびと遊べる、なおかつ遊具が豊富な公園などの施設が近所に欲しいという要望があった。また親子で遊べる公園や天候の関係上、屋内での遊び場の設置を希望する意見があった。

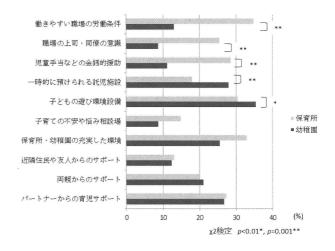


図 保育所と幼稚園の母親が求める子育て支援の比較

		20.	OD Q/ 111112	0 137111 2 3	13 4 2012	, 2 X IL C	> 1>4>			
保育所(N =84)										
	パートナー	両親から	近隣住民/	保育施設	子育ての	子どもの	一時的に	児童手当	職場の上	働きやす
	からの育児	のサポー	友人からの	の充実し	不安や悩	遊び環境	預けられる	などの金	司・同僚	い職場の
	サポート	<b>F</b>	サポート	た環境	み相談場	設備	託児施設	銭的援助	の意識	労働条件
SDQ 総得点	0.09	-0.07	0.20	0.00	0.05	0.09	0.09	0.02	-0.10	-0.01
行動面	0.23*	0.08	0.10	0.03	0.04	0.05	-0.10	0.03	-0.02	0.04
多動・不注意面	0.11	-0.11	0.33*	-0.17	0.17	0.04	0.09	0.10	0.01	-0.04
情緒面	-0.05	-0.03	0.14	0.10	0.05	0.21	0.25*	-0.04	-0.08	0.01
仲間関係	-0.16	-0.12	-0.18	0.03	-0.21	-0.12	0.00	-0.06	-0.18	-0.04
向社会性	-0.01	0.04	0.00	0.12	0.13	0.20	0.19	0.02	0.07	-0.04
HADS 総得点	0.03	-0.03	0.15	-0.13	0.04	-0.13	0.05	-0.19	-0.18	-0.19
抑うつ	0.08	-0.01	0.12	-0.06	0.02	-0.13	0.05	-0.18	-0.16	0.02
不安	-0.03	-0.05	0.15	-0.19	0.50	-0.10	0.05	-0.15	-0.18	-0.12

表 4 SDQ/HADS 得点と子育て支援の必要性との関連性

幼稚園(N =74)

				***************************************						
	パートナー	両親から	近隣住民/	保育施設	子育ての	子どもの	一時的に	児童手当	職場の上	働きやす
	からの育児	のサポー	友人からの	の充実し	不安や悩	遊び環境	預けられる	などの金	司・同僚	い職場の
	サポート	1	サポート	た環境	み相談場	設備	託児施設	銭的援助	の意識	労働条件
SDQ 総得点	0.19	0.10	0.03	0.03	0.30**	0.08	0.06	-0.05	-0.08	-0.03
行動面	0.11	0.05	0.02	-0.02	0.23*	0.01	0.07	-0.03	-0.02	-0.10
多動・不注意面	0.15	0.04	0.02	-0.13	0.28*	0.01	0.09	-0.13	-0.11	-0.04
情緒面	0.21	0.10	-0.09	0.19	0.07	0.09	0.01	0.07	-0.07	0.02
仲間関係	0.03	0.10	0.14	0.12	0.22	0.13	-0.05	0.00	0.03	0.05
向社会性	0.02	0.06	0.07	-0.06	-0.01	-0.02	0.07	-0.02	-0.08	-0.08
HADS 総得点	0.15	-0.02	-0.17	-0.21	0.32**	0.02	-0.08	0.14	0.12	-0.10
抑うつ	0.13	0.01	-0.14	-0.19	0.26*	-0.10	-0.04	0.14	0.14	-0.08
不安	0.15	-0.04	-0.17	-0.19	0.33**	0.14	-0.11	-0.12	0.07	-0.10

注:SDQ: Strength and Difficulities Questionaire, HADS: Hospital Anxiety and Depression Scale

注:網掛けのところは、SDQと HADS のそれぞれの項目において相関が示された。

\*p<0.05, \*\*p<0.01

# 4. 子どもの行動特性や母親の心理的な状態により求められる子育で支援について

表4に示すように、保育所ではSDQの「行動面」と「パートナーからの育児サポート」、「多動・不注意面」と「近隣住民や友人からのサポート」、「情緒面」と「一時的に預けられる託児施設」において有意な相関が示された。一方、幼稚園では、SDQの総得点、「行動面」、「多動・不注意面」、HADSの総得点、「抑うつ」、「不安」と「子育ての不安や悩みを相談できる相談場所」において有意な相関が示された。

#### Ⅳ. 考 察

#### 1. 「気になる」子どもの割合

本研究において、幼児期の子ども161名のうち、気になる子どもの割合は21.0%であった。玉井らの実施した幼児196名のうち、気になる子どもの割合が31.1%とした結果と比較すると、本研究の方が低い値

であった。玉井らの研究では、保育士による評価を採用したため、母親による評価と比べるとその割合が高くなった可能性が示唆される。子どもの評価の場合、専門家の方が母親に比して評価得点が高くなる傾向がある<sup>16)</sup>。また子どもの年齢層も年長児に限定したことから、本研究の結果と差が示されたことが推測される。

支援の必要性については、主に子どもの行動面に問題が生じると、気になると母親は判断していると考えられる。この結果は、多動などの行動面の問題をもつ子どもでは、支援レベルが High Need であったことを示した西村ら<sup>19</sup>の研究と一致する。また気になる子どもの特性の上位として行動面の問題が報告されている<sup>6</sup>。したがって、幼児期のころは子どもがかんしゃくを起こすことや、他児と喧嘩をするなど、比較的、母親にとって表面化しやすい問題行動を「気になる子ども」の行動特徴として捉える傾向がある。これらの項目が気になる子どもの指標になることを、保育者が理解しておくことで、必要に応じて、専門機関を紹介したり、子育ての悩みを聞いたりなど、早期の段階で保護者へ適切な対応が可能になる。

#### 2. 子どもの行動特性および母親の心理的な状態

保育所に通う子どもの母親の方が、幼稚園に比べて SDQ の総得点、「行動面」、「多動・不注意面」、「情緒面」 において得点が高かった。本研究においては、気にな る子どもの割合が幼稚園に比べて保育所で高かったた め、SDQ の総得点が高くなったと思われる。また保 育所において子どもの行動特性を検討した研究では, ADHD にみられるような行動上の問題や、情緒不安 定などが気になる子どもの行動特性であると報告して いる<sup>6,13)</sup>。つまり、母親は、生活の中で多動など比較 的目立つ行動や、日中、体調不良を訴えたり、心配ご とがあったり、元気がないなどの行動が、気になる子 どもの行動特性として捉える傾向がある。その一方で、 保育者にとっての気になる子どもについては、例えば 本郷らは20~22) 発達障害などの診断の有無とは関係な しに、「顕著な知的な遅れがないにもかかわらず『子 ども同士のトラブルが多い』、『自分の感情をうまくコ ントロールできない』、『多動である』などの行動特徴 をもつ子ども」が、保育者にとっての「気になる子ど も」と定義したうえで、「単に否定的行動の頻度の高 さに着目しているわけではなく、それが他児との関係 の中でトラブルなどに発展する場合に『気になる』と 感じる」ことを明らかにしている。保育所や幼稚園は、 乳幼児の集団生活の場でもあることから、個々の子ど もの姿だけではなく集団生活の中における子どもの姿 の中に気になる点を見い出していると考えられる。し たがって、家庭における子どもの姿と保育所や幼稚園 における子どもの姿が異なる可能性があることにも配 慮しながら、「行動面」、「多動・不注意面」、「情緒面」といった項目が母親にとって気になる子どもであることを理解し、援助的な関わり方を考えるための共通指標とすることで、気になる子どもに気づく保育者になれることが期待できると考えられる<sup>13)</sup>。また、なぜ子どもの行動が落ち着かないのかに関する理由などについて、保育者が子どもの行動特性の問題を検討し、母親とその行動上の特性を共通理解することにより、母親も子どもの発達を理解し、家庭において子どもへ適切な対応が可能になる。

母親の心理的な状態については、両群で差は認められなかった。先行研究では、養育感情と母親の就業有無において関係性があると報告しているが<sup>1,23)</sup>,先行研究と本研究の結果の差異は就業状況の定義の異なりが影響している可能性がある。また、今回使用したHADSは育児不安を評価するために作成された質問紙ではないため、結果が異なった可能性がある。今回HADSを使用した理由は、国内外で有用性の検討が行われている簡易型の質問紙であるためである。今後は育児中の母親の心理面を容易に評価できる質問紙の標準化に関する研究が必要であろう。

#### 3. 子育て支援

市町村が行う子育で支援の満足度については、およそ半数が満足であると回答している。保育所では、母親が就業しているため、職場で育児に対する理解が得られない状況が反映している。この結果は、女性が子どもをもつ前後で職業キャリア意識が変化したことと関係している。仕事を持つ母親は、昇進や専門性の向上には興味がなく、仕事以外の生活を充実させたいというように、以前に比べて職業キャリア意識が変化している。そして職業キャリア意識の変化の理由の1つとして「仕事と育児との両立について、職場や上司の理解が得られない」ことをあげている<sup>24)</sup>。このような状況が、いまだ M 字型カーブを描いている社会を反映していることが推測できる。子育て中の女性の活躍を推進するためには、企業や社会の子育てに対する理解の向上や環境整備が求められる。

幼稚園では、子育てのことで困った時に、一時的に 預けられる場所がない。このような背景から、幼稚園 に子どもを預ける母親は、認定こども園という保育所 と幼稚園の機能が一体型になる施設を望んでいること が予測される。認定こども園は待機児童の解消や、地 域による子育で支援のための政策であると思われる。また近年厚生労働省が掲げている地域の子育で支援も盛んに行われているが<sup>30</sup>, 祝祭日にも一時的に子どもを預けることが可能である場の設置が求められる。遊び環境設備については,近年は遊具の安全性の問題から,大型遊具が次々と姿を消し,近辺の住民の迷惑となるため,野球やサッカーなどの運動を禁止する公園も存在する。子どもがのびのびと身体を動かし,元気に走り回れる施設や安全性が認められた遊具の充実,公園の管理体制が必要であろう。また天候の関係で,雪が多く外で遊ぶことが難しい場では,屋内で思い切り身体を動かせる施設の設置が求められる。

# 4. 子どもの行動特性や母親の心理的な状態により求められる子育で支援について

保育所において、子どもに行動面、多動・不注意面、 情緒面の問題があると、パートナーである夫、友人や 近隣住民からのサポート、一時的に預けられる託児施 設を求めることが多かった。子どもがかんしゃくを起 こしたり、他の子どもと喧嘩が絶えないなどの行動上 の問題や、落ち着きがなかったり、衝動的であったり、 気が散りやすいなど ADHD に類似した特徴を示した り、気分の不安定を示した場合には、就業している母 親では、どうしても家庭内で子どもと向き合う時間が 減少してしまうために、人的なサポートが必要になる ことが推測できる。特に子どもの年齢が低い場合に は、他人からのサポートが少なくなる傾向がある25)。 また海外に比べて、わが国では母親が就業していても、 父親の育児参加やサポートは低い260。さらに母親の仕 事の都合で育児が困難になった場合に迅速に対応して くれる託児施設を望むことが予測される。就業してい る母親をサポートするためには、一人で子育てすると いう環境ではなく. 父親の育児参加をさらに促したり. 家庭の状況に対して柔軟に対応可能な託児施設のサー ビスを展開するなど、社会全体で子育てを支援する仕 組みを作り出す必要がある。

一方, 幼稚園では, 子どもに行動面, 多動・不注意面, 情緒面の問題があったり, 保護者の心理的な負担がある時には, 子育ての不安や悩みを相談できる相談場所を求めることが多かった。幼稚園児の母親では, 不安がある人ほど, 仲のよい幼稚園の母親が少なく, 会話の頻度も少なくなる。また幼稚園児の母親のうち, およそ40%が自分の子どもの育児に自信がなく, 自分一

人で子育てをしていると感じている<sup>27)</sup>。近年,特に都市部では,他人との交流が少なく,母親自身も子どもと触れ合った経験がほとんどないため,専門書から子育てを学ぶことも少なくない。しかしながら,子育では思うようにいかないことが多いため,母親の多くは,他人に相談できる場を求めていることを指摘している<sup>9)</sup>。したがって,幼稚園児の子育でをしており,就業していない母親が社会から孤立化しないように,地域交流,親子活動,母親同士のネットワークを促す子育で支援が必要である。

本研究ではサンプル数が十分でなかった。今後は, さらに大きなサンプルを用いて,データの蓄積を行う とともに,認定こども園を含めた検討が必要になるで あろう。また都市部と地方における比較検討も今後の 課題である。

#### V. 結 論

本研究では、母親の養育環境別に、子どもの行動特 性や母親の心理的な状態により、どのような子育て支 援が必要とされているのかについて検討した。幼児期 の子どもをもつ母親は子どもに行動面の問題がある と、気になると捉える傾向が明らかとなった。また母 親が求める子育てのサポートが養育環境により異なっ ていた。したがって、子育ての悩みを持つ保育所の母 親に対しては、保育施設や地域の子育てセンターなど で、柔軟な機能を備えた子ども預かりサービスを展開 することが必要になるであろう。また、子育てに悩ん でいたり、気持ちが落ち込んだり、不安を持つ状態に ある幼稚園の母親に対しては、地域で気楽に子育ての 話や相談ができる機会の場を設けることや、保育関係 者がそのような機関を紹介することが有効になるであ ろう。今後、女性はさまざまな生き方となるため、そ れぞれの養育環境に合わせた子育て支援を作り上げる ことが緊急の課題といえる。

#### 謝辞

本研究にご協力頂きました伊勢田 咲さんに深く感謝申し上げます。

利益相反に関する開示事項はありません。

#### 文 献

1) ベネッセ次世代育成研究所、母親の教育・子育てに

- 関する意識. 第4回幼児の生活アンケート報告書 2010:6:64-75.
- 2) 末次有加. 戦後日本における障害児保育の展開: 1950年代から1970年代を中心に. 大阪大学教育学年報 2011;16:173-180.
- 3) 黒川久美. 保育園における特別な支援を必要とする 乳幼児の実態と課題―保育者へのアンケート調査よ り一. 南九州大学人間発達研究. 2012;2:57-68.
- 4) 平成23年度保育園・幼稚園における発達障害児に関する実態調査について. 静岡市保健福祉子ども局福祉部, 2013:1-24.
- 5) 郷間英世, 郷間安美子, 川越奈津子. 保育園に在籍 している診断のついている障害児および診断がつい ていないが保育上困難を有する「気になる子ども」 についての調査研究. 京都国際社会福祉センター紀 要 2007; 23:19-29.
- 6) 平澤紀子,藤原義博,山根正夫.保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究―障害群から見た該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から―.発達障害研究 2005;26:4:256-267.
- 7) 小川圭子,鎌田陽世,成本忠正,他. 兵庫県の私立 幼稚園における「気になる子ども」調査1. 日本教育心理学会発表論文集,2009:192.
- 8) 伊藤淳一. 発達障害児の背景にある家庭養育上の問題. 小児保健研究 1998;57:90-94.
- 9) 横倉 聡, 田中利則, 和田光一, 他. 保育の今を問う相談援助. 第一版. 東京:ミネルヴァ書房, 2014.
- 10) 郷間英世,川越奈津子,宮地知美,他. 幼児期の「気になる子」の養育上の問題点と子どもの行動特徴―保育園の巡回相談事例の検討―. 京都教育大学紀要2009;115:123-130.
- 11) Goodman R. The Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A research note. J Child Psychol Psychiatry 1997; 38:581-586.
- 12) Matsuishi T, Nagano M, Araki Y, et al. Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples.

  Brain Dev 2008; 30: 410-415.
- 13) 玉井ふみ, 堀江真由美, 寺脇 希, 他. 就学前に おける「気になる子ども」の行動特性に関する検 討. 県立広島大学保健福祉学部誌 2011;11(1):

- 103-112.
- 14) Zigmond AS, Snaith RP, 北村俊則訳. The Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS 尺度). 精神科診断 1993; 4:371-372.
- 15) 東あかね、八城博子、清田啓介、他、消化器内科外来における hospital anxiety and depression scale (HADS 尺度) 日本語版の信頼性と妥当性の検討、日本消化器病学会誌 1996:93:18-26.
- 16) 玉井創太,石井智子,日戸由刈,他.日本語版 M-CHAT を用いた自閉症スペクトラム障害の早期 評価―親の記入データと専門家の直接観察データと の乖離.日本臨床発達心理士会第8回全国大会論文集.2012:86.
- 17) 文部科学省. 平成24年度特別支援教育体制整備状况 調査. [cited 2014/1/10] Available from: < http://www.mext.go.jp/a\_menu/shotou/tokubetu/mate-rial/1334953.htm >
- 18) 佐久間庸子,田部絢子,高橋 智.幼稚園における 特別支援教育の現状:全国公立幼稚園調査からみた特 別な配慮を要する幼児の実態と支援の課題.東京学芸 大学紀要総合教育科学系 2011;62(2):153-173.
- 19) 西村智子, 小泉冷三. 就学前の「気になる」子の行動特性と発達障害の関係. 研究論文集—教育系·文系の九州地区国立大学間連携論文集— 2011;5(1):1-11.
- 20) 本郷一夫, 澤江幸則, 鈴木智子, 他. 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究. 発達障害研究 2003; 25(1):50-61.
- 21) 本郷一夫, 杉村僚子, 飯島典子, 他. 保育の場における「気になる」子どもの保育支援に関する研究2. 東北大学大学院教育学研究科教育ットワーク研究室 年報 2006a;6:35-44.
- 22) 本郷一夫, 飯島典子, 平川久美子. 「気になる」幼児 の発達の遅れと偏りに関する研究. 東北大学大学院 教育学研究科研究年報 2010;58(2):121-133.
- 23) 牧野カツコ. 働く母親と育児不安. 家庭教育研究所 紀要 1983;2:41-51.
- 24) 厚生労働省. 平成23年版 働く女性の実情. [cited 2013/9/15] Available from: < http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/11gaiyou.pdf >
- 25) 荒牧美佐子, 田村 毅. 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因―幼稚園児を持つ母親の場合―. 東京学芸大学紀要 2003;

55:83-93.

- 26) 総務省統計局. 平成18年社会生活基本調査. 詳細行動分類による生活時間に関する結果. [cited 2013/9/15] Available from: < http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid = 000001009957&cycode = 0 >
- 27) 中村真弓. 育児不安と母親の仲間関係. 尚桐学園研究紀要 A 人文・社会科学編 2008; 2:1-12.

#### (Summary)

I examined how child-support programs were related to both children's behavior characteristics and mother's psychological aspects in 121 mothers nurturing children in childhood (one group: mother's children going to nursery center (nursery center groups), the other group: those of children going to kindergarten (kindergarten groups)). The rate of children with developmental problems that mothers get anxious was approximately 20%.

The mothers answered that the most serious problem for children who require special needs was their behavioral problems. Opinions about child-support programs were different between the nursery center groups and kindergarten groups. In the nursery center groups, when the mothers felt that children had some developmental problems, they needed cooperation in human resources. In the kindergarten groups, when the mothers felt that children had some developmental problems and became anxious and depression, they needed places where they could address some problems of nurturing. The findings could be used to build high-quality child-support programs in future.

(Key words)
child-support program,
children's behavior characteristics,
mother's psychological aspects, childhood, employment